演題番号17

脳卒中片麻痺患者に対する継続的な感覚識別課題の介入効果

○林 節也[1] 菅沼 惇一[2] 田口 周司[3] 千鳥 司浩[2]

1) 介護老人保健施設 山県グリーンポート
2) 中部学院大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科
3) 岩砂病院・岩砂マタニティ

【はじめに】

スポンジを用いた硬度識別課題を実施することで運動パフォーマンスが改善すると報告（藤田, 2011）があるが感覚機能自体の変化に関する報告はない．今回，回復期病棟に入棟中の脳損傷患者に対し，継続的に実践した足底の感覚識別課題が感覚閾値に与える影響を検討した．

【方法】

対象者は回復期病棟に入棟している脳損傷片麻痺患者12名，触覚は軽度から中等度鈍麻とした．ランダムに足底の感覚識別課題群（介入群）と通常リハ群（コントロール群），それぞれ6名の2つのグループに分け効果検証を実施した．平均年齢は介入群67.7±8.9歳，コントロール群72.2±6.7歳であった．罹患期間は介入群67.2±19.0日，コントロール群68.5日±20.1日であった．介入群は通常の運動療法に加え，他動で足底における表面性状の識別課題（板，畳，絨毯）と3段階のスポンジ硬度識別課題を実施した．コントロール群は通常の運動機能の向上を目的とした運動療法（可動域訓練，筋力訓練，バランス訓練）を実施した．介入期間は２週間とし，介入効果の判定として，介入前と介入後に感覚機能面の評価として母趾，母趾球，小趾球，踵に対してモノフィラメントを用いた触覚検査と複合感覚である2点識別覚を計測した．統計処理にはAsB-Typeデザインによる分散分析を実施し，主効果および交互作用があった際に後検定として多重比較検定を実施した．

【結果】

触覚は介入群，コントロール群ともに介入前後で有意な変化は認められなかった．しかし，2点識別覚は両群共に足底の全部位において介入前後で有意差を認め，特に小趾球では介入群で有意な差を認め減少を示した．

【考察】

認知神経リハビリテーションの基本である感覚の識別課題の効果を通常リハ群と比較し介入効果の検証を行った．結果から介入により足底の触覚は変化しないものの，小趾球での2点識別覚は介入群において有意に改善を示した．情報化のためには単なる感覚刺激でなく，差異の検出が必要である（Recanzone, 1992）とし，加えて，足底各部における感覚閾値は踵で最も高く，中足部外側で最も低い傾向にあると報告（建内, 2007）している．よって，閾値の低い小趾球は足底の感覚識別課題を実施することで，他部位に比べ介入効果が高い可能性があることが示された．

【説明と同意】

本研究は紙面にて対象者に説明と同意を得て実施した．